

IV 保護上重要な野生生物種

1. 植物

【選定・評価方法の概要】

絶滅や絶滅が危惧される種の選定と評価は、原則として環境省版レッドリストカテゴリー（2007）の定量的要件を用いた。

検討対象種は、東京都に野生する植物全種の一覧を含む『東京都の野生生物種目録 1998 年版』を基礎に、伊豆諸島 436 種（前回（1998 年版）の掲載種は 306 種）、小笠原諸島 196 種（同 121 種）とした。これらの種について、有識者や地元の団体・個人等の協力を得て株数や減少率等に関する情報の収集を行い、このデータをコンピュータ上で解析しカテゴリーを判定した。

【選定・評価結果の概要】

検討対象種について、1 種ずつ評価を行った結果、本書に掲載される絶滅または絶滅が危惧される種として選定されたのは伊豆諸島で 348 種、小笠原諸島で 169 種で、その数は、前回（1998 年）の調査での選定に比べてそれぞれ 42 種、48 種増加した。

種数の増加は、主に各種の開発による自然環境の攪乱と破壊が 1998 年以降も進行し、生育場所の環境の劣化によっている。また盗掘やノヤギ（野生化したヤギ）による食害の影響もある。温暖化などの自然環境自体の変化が、絶滅やその危惧の増大の原因と考えられるケースは見出せなかった。副次的ではあるが、環境省基準の採用によって前回とは異なった評価を行ったことも選定種数の増加をもたらしている。また、現地情報が前回に比べ格段に増加し、絶滅に瀕している現状を明らかにしたことも選定種数の増加に関係している。

こうした評価方法の客観性の向上と現地情報の増加にみる絶滅危惧種への関心の高まりは、前回調査に比べ絶滅や絶滅危惧種に関する情報の精度と信頼度を大幅に高めている。現地情報の増加には、植物愛好家や各種団体によって行われてきた自発的な各島あるいは小地域ごとの克明な植物相調査が大きく寄与していることを記しておく。

今回新たに伊豆諸島でオナモミが「絶滅」と判定され、都の島しょ部における植物の絶滅（EX）は 4 種になった。

都の島しょ部は大きく、伊豆諸島と小笠原諸島に分かれ、その植物相は異なる。伊豆諸島の植物相は本土側の伊豆半島や三浦半島などと共通する種が多く産するが、小笠原諸島の植物相は他地域との類縁性が低く固有性が高い。伊豆諸島では無人島を除き、古くから人間活動が活発に行われ、自然植生の多くにも人為が及ぶ。小笠原諸島でも父島や母島など大きな島では人間活動が植生に多大な影響を及ぼしており、また、父島などでは野生化したノヤギによる食害が植生に影響を与えてきた。絶滅が危惧されるムニンタツナミソウ、シマウツボなどの種は食害が個体数の減少をもたらす最大の要因となっているが、近年、

ノヤギ排除が進み、回復してきている例もある。

小笠原諸島の南端を占める火山列島の北硫黄島と南硫黄島はともに無人島であるが、比較的起源の新しい火山島である。山頂部分の標高は 800m 以上におよび、雲霧帯となり、雲霧林が発達する。南硫黄島は原生自然環境保全地域に指定され、生物相が保護される。両島とも第四紀に誕生した起源の新しい島であるにもかかわらず、進化速度が速いヘゴ属やヒメウラボシ属、シュスラン属には、実際に、エダウチムニンヘゴ、ナガバコウラボシ、ナンカイシュスランなどに固有種があることは注目されよう。

海洋島に共通して発達がみられるキク科の低木種からなるスカレシア型低木林^{*1}は、日本では小笠原諸島のみに見られる低木林である。この低木林にはワダンノキをはじめ数多くの固有種があり、希少性が極めて高い。この種を含め小笠原諸島には進化速度が遅い木本属での固有種が多く見られる。これは小笠原諸島の植物相の起源の古さを示唆するものであろう。これは草本性の固有種が多い伊豆諸島と根本的に異なる点である。

^{*1} 木化したキク科植物からなる小低木群落で、ガラパゴス諸島の一斉更新をするスカレシア林が名高い。多くは直立した茎をもち、葉は茎の上部に集まってつく。

(大場 秀章)